

宇治川水理実験所の思い出

- 実験所の 50 周年と本館とのお別れを記念して -

平成 15 年 3 月

はじめに

今年度最初の技術室出版委員会において、「技術室報告」の今年度の編集方針を話合う中で、宇治川水理実験所が昭和27年3月に命名されてから今年で50周年を迎えたのを記念して、実験所にゆかりのあるOBを含めた防災研究所の技術職員の方々から思い出話を寄せて戴きまとめようということになりました。私が現在も宇治川水理実験所に勤めていることから、その取りまとめの役を任されることになりました。そこで、現役とOBとを合わせて22名の方をリストアップし、どうしてもご住所が分からなかった1名を除き21名の方に寄稿をお願いしました。私が作った寄稿のお願いの文章が舌足らずで分かりにくく、寄稿するかどうか迷われた方も多かったようで、結局、6名の方の寄稿になりました。また、1名の方は原稿を書いておられたのですが、残念なことに、多忙の中ついうっかり投函するのをお忘れになり、締め切りに間に合いませんでした。とにかく、6名の方には、貴重な思い出を戴き大変感謝しています。改めてお礼申し上げます。

宇治川水理実験所の本館は今年度中に取り壊されます。編集会議のあった昨年の夏の時点では取り壊しがまだ明らかになっておらず、誰一人予想していなかったのですが、はからずもこの特集と実験所本館とのお別れが重なってしまいました。そういった訳で、この特集は記念すべきものとなりました。

実験所本館は、大正12年に火力発電所として建てられ、そののち本学結核研究所が所有していたものを防災研究所が引き継ぎ、昭和27年3月より宇治川水理実験所の本館として使用されてきました。防災研究所が宇治構内に統合される前の昭和40年代初め、多いときには学生も含めて120名以上の人々が宇治川水理実験所で働き学んでいました。その中で我々技術職員（技官）も、20名近くの仲間が働いていました。技術職員に限らずみんなおしなべて年齢が若く、実験所全体がはつらつと活気に満ちていました。そのような思い出にまつわる実験所本館も、この「技術室報告」が発刊される頃には、きれいさっぱり跡形もなく更地になっていることでしょう。これもまた新たな旅立ちの幕開けとなるに違いありません。

最後に、寄せられた原稿は、誤字・脱字などについて最小限の修正を行なわせて戴きましたことをお断りしておきます。その結果、かえって読みづらいものになっているとしたら私の責任です。

2003年2月13日

藤原清司

実験所全景と実験所本館



昭和 50 年代
初めの実験所全景



新実験棟完成
(平成 10 年秋)
後の実験所全景



実験所本館
(平成 14 年秋)

宇治川水理実験所の思い出

谷 泰 雄

(1969年3月まで実験所に勤務)

(まえがき)

この度、実験所の方から「思い出」の寄稿の依頼があり、私としては書くか書かないか数日間考えがまとまらず悩みました。それというのも、京大防災研究所四十年史に回顧録として詳しく書かせていただいたこと、また、今後は過去の事実を一生の思い出として自分の脳裏に残しておきたかったからです。しかしながら、依頼文にもあるように職員数の減少、建物の老朽化等、これからどう変わっていくのか最も活気ある時代を過ごした者にとっては不安と寂しさが入り交じり、さらなる発展をと願いつつ筆をとることにしました。

四十年史に書かせてもらいましたので、ここでは特に記憶に残っていることを書かせていただきます。昭和三十年五月、この地が私の人生の始まりでした。それより平成三年定年退職するまで、京大一筋に三十五年間務めたこととなります。実験所での勤務は十二年間ほどでしたが最も強く印象に残っています。

(最初の仕事について)

最初に与えられた仕事は、速水、赤井両先生が研究されておられた地盤沈下に関する水理実験の準備でした。実験槽を作るため砂を運び入れることから始まりました。屋外の砂置き場で砂をふるいにかけてリヤカーで運搬する方法で、二人で夏場も含め三ヶ月くらい要したと思います。リヤカー運搬、砂ふるいの光景は今では見られないものです。すべてが人力によるものでしたから、仕事が終わった日はなんともいえない満足感がありました。実験内容もゲージやガラス管の水位を目視で読みとる単純な方法でした。先生の指導による創意工夫の考える力を得た次第です。この研究報告は防災研究所五周年記念論文集に速水、赤井両先生連名で発表されておられます。

(被災について)

昭和三十六年九月、第二室戸台風が近畿地方を直撃、実験所本館、実験施設、木造管理棟が多大な被害を受け、特に管理棟の屋根瓦の大半が吹き飛び使用不可能な状態でした。そこで先生方が先頭となり、所員、学生総出で仮復旧を行うことになり、残った瓦を取り除きトタンを張り雨漏りを防ぎました。この作業にだれ一人不満をいう者もなく皆必死で作業に当たったものです。協力の精神こそ偉大なものと痛感した次第です。

(災害調査のこと)

昭和三十九年六月、新潟地震が発生、防災研究所に特別調査班が結成されすべての研究部門が参加されました。水理実験所でも一班、二班に分けて調査隊が決まり、私も第二班での参加を命じられました。第一班の先発隊は、災害直後でもあり観測車に飲料水を満載、一ヶ月近く調査され非常に苦勞された記憶があります。調査手段も車でないと駄目ということで、私が車の運転を命じられた次第です。新車の貨物乗用車で四人位で、新潟まで約

十五時間かかったと思います。免許取得後日も浅かったので、これだけの長距離運転は非常に不安がありました。現地では毎日、車で測量やデータ収集を行い、約半月ほど市内、市外と調査が続きました。帰りは東京の先生の家で一泊、翌日の夜帰京しました。延べ走行距離二千キロを越えていたのには驚きました。今思うと、よく無事で体力が持ったものと若き頃のよき思い出です。

(カレーライスの味)

当時、実験所に職員で勝木のおばさんがおられ、所員や学生の食事の世話をしておられました。私も昼食、宿直時の夕食を作っていました。その味は絶品で、なかでもカレーライスの味はいまだに忘れられません。今でもカレーは好きで、家でも外でも食べていますが、昔の勝木さんの味に出会えないのが残念です。その他定食も今でいうおふくろの味で、学生にも大人気で食事だけに来る人もいたようです。今は天国で、おいしい食事を作っておられることでしょう。

(まとめ)

ここまで、特に心に残ったことを書いてきましたが、仕事、出張、スポーツ、リクリエーションと思いはつきません。実験所の姿は、京阪電車を利用したとき必ず建物が見える窓側に位置して見てきました。現在では敷地が道路で二分され、工場のような建物が沿線にそって建てられ、京大防災研究所と書かれた大きな看板が特に目につきます。本館だけが昔と変わらずなつかしさを感じます。

近年、大学附置研究所のあり方が検討されるようになり、私も在職中に他の医学系研究所で改組、名称の変更等行政の立場で経験してきました。宇治地区の研究所も事務部が統合されたようです。宇治川水理実験所の将来は私にはわかりませんが、益々の発展を望むだけです。

技術職員の採用もむつかしくなり、職員数の減少はさみしいものです。これも時代の流れなのでしょう。最後に、私が当時大変お世話になった速水、矢野、足立、樋口の各先生方、職員の山本、今井、勝木さんも故人になりました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げますと共に、現役の皆様方のますますのご活躍をお願い申し上げます。

思 い 出

中 村 行 雄

(2002 年度から研究支援推進員)

私が、宇治川水理実験所にお世話になったのは、今から 40 数年さかのぼって昭和 35 年 12 月 25 日の事である。矢野研究室の足立昭平先生に色々ご面倒をおかけした。助手の大同淳之先生の御指導で山口県の粟野川河口のショウトカットの模型実験を手始めに、私は土木の道への入り口に立った。従来は、商業コースの道を歩んでいたのであるが、ここにきて未知の世界へ飛び込んだのである。最初は、大変臆病な日々であった。がそれでは済まされない。入った以上は、自分のわがままは許されない。与えられた仕事にまい進することが、今私にかけられた責務である。とは言ってみても、十八歳の鼻垂れ小僧である私にとっては何が何やら判らずに飛び込んだ世界である。雇い主は壺を聞いて十を知れと思っていることであろう。あにはからんや十を聞いて十の事さえ出来かねる人間である。それが現実で、いくら高望みをして中々思うようにはいかぬものである。

最初は、暖房のための石炭ストーブの火の入れ方から教授を受けた。やってみるとこれも中々難しい代物である、失敗を繰り返しどうにかまともに火入れを完了するとともに一日が始まる。本館西の実験場で通水を始め、実験を開始する事になる。実験器具の点検・整備の後本格的に通水をはじめ、測定を行なう実験は、平水時から洪水時までの過程を順を追って行なうのであるが、一ケースの実験に数時間を要する事もしばしばで、水の流れが落ち着くのに時間を要し、測定を行なう時間は数分で完了するが、実験は繰り返し繰り返し念を入れて、測定する事が科せられている。一般的には一度やればそれで良いのであるが、実験の性質上それはそれは念入りに実験・観測する必要があった。

通水は一日中行なうのであるが、その為には本館一階の渦巻きポンプを一日中稼働させるのである。消費電力は相当な額になるのではなかろうか、しかし研究の為にそうは言われていられない。しかし、外部の人々には一見無駄をしているように見えるであろう。が、これも実験によるより良きデータをうるためには時間と労力といった経費は必要かつ有効な手段である。こうした事を述べると一見良識人のように見えるが、私達凡人は、凡人なりに思考をめぐらし当たり前の事は当たり前という事を認識せざるを得ない。何時の日か歳をとると、このように理屈っぽい人間になってしまったのであるが誰のせいでもない。自分自身の問題なのである。友人に物書きをする人間がいるが、普通一般人には到底理解に苦しむ事を平気で述べる奴がいる。このような事を書く宇治川の思い出とは離れてしまうので、これくらいにして、本題へ移行しようとする。

藤原さんの寄稿願いにも述べられているのであるが、一時期実験所に 100 人程の教官・技術職員・非常勤職員・学生といった人々が防災学の研究に勤しまれていたのであるが、昭和 45 年の春に宇治に拠点を移すまで、実験所は其れは其れは大変な規模の賑い振り

あった。今は亡き矢野勝正名誉教授を筆頭に下っ端の私達にいたるまで、春には桜・夏には海水浴・秋には運動会・冬にはストーブを囲み防災談議と、春夏秋冬、実に盛りだくさんの日々を送っていたのである。

本館前南西方向にある河川実験場において、安曇川や大戸川の模型実験を行っていた実験場がある。ここで、瀬田川・大戸川の合流点処理の模型による実験を、芦田先生の御指導で行なった。最初は、模型の制作であるが何分初めての経験なので、模型の制作から、立案まで田中先生とともに行なった。本館の粗度水路で予備実験を行ない、模型の縮尺を



1/60 に決定して、設計し、模型の制作までの間監督のため立ち会った。こうして実験を開始、始めに上流の量水槽の流量検定を行ない、模型に通水、河道には珪石7号の実験用砂を敷き詰め移動床として実験を開始した。そうして、目的の導流堤の規模を如何にするか等など実験的考察を行なった。この研究は『模型実験による瀬田川・大戸川合流点処理に関する研究』として纏められた。

余暇について、実験所は宇治川の傍にあって、大挙して魚釣りに興じた事もしばしばで、小魚を釣り上げては悦にいったものであった。また、昼休みになるとソフト、テニスに実験の姿そのまま、ゲームに参加し勝ち残りが進められた。コートは1面で一度負けるとプレーの順番がなかなか回ってこないのである。其れだけの大世帯であったということである。テニスシーズンが終わると、ソフトボールのゲームに移行し、ホームベースを宇治川の堤防の反対側に設置し堤防側は外野となる。その外野の堤防をオーバーするバッターが競って競演するのである。私は非力でフェンスをオーバーする事はかなわなかった。こうした強力なバッターを揃えて京都大学総長杯の野球に優勝された事も有る。

余談になるが、夏の暑い盛りには、研究室でアミダくじをして、アイスクリーム・キャンデーなどの買出しに行く人、お金を十円・二十円・五十円・百円・二百円とくじで集めて、くじ運の良い人は無料・買出しも無しと言う人もあり、様々であるが、これもエピソードの一つである。

以上、あれこれと、羅列したのであるが宇治川水理の構成員は、防災研究の傍らこうした楽しみも持ち合わせていたのである。

宇治川水理実験所の思い出

石井 義明
(1971年4月呉高専へ)

勉強嫌いだっただ私が25歳の頃、なぜか急に勉強をやり直したい気持ちにかられ、恐れ多くも宇治川水理実験所でお世話になるようになったのが昭和38年5月でした。それから昭和45年の春、宇治構内に統合されるまでの約7年間置いて戴きました。多感な年代だったため今も心に占める比重は大です。それから約40年も経ったのですから、水理実験所周辺の環境も随分変わったことでしょう。当時は京阪中書島から砂利道の下三栖川堤防を通る自転車通勤でした。堤防から前方に広がる美しい田園風景の中に、鳶の絡まった古い旧発電所の建物、宇治川水理実験所があり、当時の風景、日々の出来事、教職員の方々等々が今も懐かしく、鮮明に思い出されます。

最初に思い出しますのはソフトボールです。昼休みになると狭いテニスコートで、大雨でも降らないかぎり、防災独特の野球ルールに従って毎日熱心に行われ、三度の食事よりも好きだった私も楽しく参加させてもらいました。ピッチャーの柴田先生、サードの高樟先生をはじめ、度々宇治川の堤防を越す大ホームランを飛ばす強打、豪打のつわ者、チャンスに強い好打者など粒ぞろいだった事など楽しく思い出されます。特に、全京大職員の野球或いはソフトボール大会では、作業着にゴムぞうり姿の宇治川チームが、ユニフォームとスパイクの揃った本部事務職員等のチームを次々撃破した事も強く印象に残っております。

私がお世話になっていた地盤災害研究室には村山先生以下、柴田、松尾、八木、軽部の諸先生方が在籍されておりました。これは当時の、またその後の日本や世界の土質工学会の中心となって活躍された超大物の先生方です。このため研究面はトンネル土圧と崩壊のメカニズム、粘土のレオロジカルな性質、砂のダイレンタンシー特性、粘土のせん断特性に及ぼす中間主応力の影響など、その後土質工学の教科書が書き換えられるほど重要な基礎的研究が、また地震と地盤の関係、大阪の地盤沈下、亀の瀬地すべりなど、大きな応用的研究も進められておりました。今思えば、当時では日本有数の実験装置とすばらしい先生方に囲まれた日々であったと感謝しております。一方、力不足の私は仕事の面では何も役立てなかったのに、ゼミナールに参加させてもらったり、研究結果の学会発表を指導していただいたり、迷惑を掛けてばかりだったため今でも恥ずかしく、申し訳なかったと思うことがよくあります。ただ、昭和39年末頃まで冬期は石炭ストーブが使用されていたため、石炭を一階の石炭置き場から2階の研究室まで時々運んだくらいが研究室に貢献できた事かも知れません。また、1階の北西の片隅にあった土質恒温恒湿実験室で大学院生の不飽和土の実験を手伝い、1日中ここにこもって充実感を覚え、自己満足に浸っていた事もありました。

この他、当初の頃は正門から入った所の建物の中には食堂があり、廉価で栄養価の高い昼食を摂れたのは、独身だった私にとっては大変便利でした。しかし、調理担当の勝木のおばさんが作ってくださった玉ねぎ等の油炒めは半生のため食べづらかったが、栄養があるから食べなさいと言われ、我慢して食べた事なども今では心温まる思いです。昼食が廉価だったのは、赤字を勝木さんのポケットマネーで補われていたためと後日聞き、申し訳なかったと思うことがありました。この食堂はいつの頃から閉鎖されましたが、昭和44年7月アポロ11号の月面着陸の瞬間を矢野先生達とともに、はらはらしながら、ここでテレビを視聴した事はよき思い出となっております。

教職員と学生が一体となって催された運動会、親睦会から行った若狭湾の水泳、研究室から行った比良登山、世界的な大学者である先生方をかいぬし、おやっさん、ちょっかくさんなどと呼び親しまれていた事、ヨッさん、ワカメちゃん、カメちゃんとかの愛称で皆に親しまれていたお嬢さん方がおられたこと等々ほんとに家族的雰囲気ですばらしい研究所であったことなど思い出は尽きません。ここで得た専門知識のみならず、皆様から得た人間関係や人生観の全てが、私のその後の人生の糧となり心の財産になったと言っても過言ではありません。この事に感謝しつつ楽しい日々を送っております。最後に宇治川水理実験所の益々のご発展を祈ります。

日常的宇治川水理実験所・・・

芝野 照夫

(1986年4月福井工大へ)

初めて宇治川水理実験所に行ったのは昭和36年の春休みでした。東高瀬川の堤防から見ると「なんと異様な建物・・・」の印象でした。建物に入ると3階建てで床がない部分があったり、研究室もドアがないところはカーテンで仕切られていたり、昼休みになると大勢の人が集まって「ピンポン大会」。これがまた変なルールです。「空振り即アウト！5点勝負」。

これはソフトボールでもありました。「5アウトにファールボールアウト」。こうでないといかに順番が回ってこなかったのです。

夏の宿直では勝木のおばさんに五右衛門風呂を沸かしてもらって、部屋に蚊帳を吊って河原で取った蛍をその中に放して「風流」を装ったり、今から思うと楽しさと仕事・研究が一体になっているような実験所でした。この中で長く育ててもらった私ですが、宇治の研究所にはない「いつもドアが開いている。誰でも出入り自由」と大勢の先生、職員、学生が一体となっていた当時でした。

毎年のように学校の休みになるとアルバイトに実験所に行きましたが、最初のときの賃金は300円(時給ではなくて一日の賃金)。300円で一ヶ月の市電の学生定期が買えた時代でした。

職員となって先生方や皆さんにいろいろなことを教えてもらいました。海岸災害部門に所属しましたが岩垣先生、土屋先生、野田先生をはじめ多くの方々に研究・教育・人間、そして遊びといろんな意味で広げてもらったことに感謝しています。先生方や皆さんのお姿とその当時の若い自分の姿が今でも目に浮かびます。

樋口先生

「オーイ！北さん、人見ちゃん、芝ちゃん！」額が広い先生が呼んでいます。これは福井県高浜海岸での冬期観測のことです。京都から観測機材を積んだトラックに北川さんと一緒に乗って老ノ坂トンネルを抜けると道端の河原に車がゴロリゴロリと落ちている路上凍結の日でした。

高浜について待っていてもなかなか後続の樋口先生一行のランドクルーザーが着きません。夕方にやっと着いた樋口先生曰く「あのお巡りさん僕の頭を見て言ったのかなぁ・・・」「どうしたんですか？」と聞くと舞鶴から高浜町に入ったところで車がスリップして路肩に傾いて止まっていたときに通りがかったお巡りさんが「けがないか？」と喋って通り過ぎたとのことでした。先生はブツブツ、皆はクスクスの一場面です。

観測の夜には部屋にこもって8mmフィルムの編集をされていました。少し前に行かれたヒマラヤ登山のフィルムでした。「オーイ！出来たで皆見においで！」と喋って本邦初公開の映画を見せてもらいました。

インドやネパールのヒンズー教、ラマ教のお寺やキャラバンの様子など今ではテレビなどでよく見られる場面ですが、そのときには「へー！こんな世界も！」といった新鮮な気持ちで新しい世界を見せてもらいました。

今井さん

「今井さん、これ何とかして……。うまいこと動かへん……。」1階の工場に行くと何とかなります。「こんなアカンで、ちゃんと使わな……。」と言って手直ししてもらい、水槽に持っていくと上手く使える。今井さんの魔法にかかったような感じです。皆の実験がうまくいくように少しの余裕を持った器具を作ってくれていたのです。昼休みになると今は関西大学の井上先生はじめ谷さん、角田さんなど弁当を持って工場のストーブの周りでいろんなことを話しました。土曜日の昼から実験の合間に淀まで行って馬券を買う……。前の川では何が釣れてる……。魚の通る道と時間などなど……。

釣った魚を水槽に放せばせつかく均した砂面に魚の泳いだ跡がつき、均し直しなどいろんな実験をしたときのことを思い出します。実験の用具について今さらながら今井さんに無理な注文をして変な物？（特注品）を作ってもらいましたが、実験所にいる者にとっては「一を言えば十を知ってもらえる」本当に研究を支えてもらった方です。

電線ドロ2題

何年前か、忘れましたが、確か河川総合実験施設の建設中に建設事務所があったとき、朝、実験所に行くとき事務所の建設会社の人「電気が点かない」と言ってます。おかしいなと事務所まで引き込んで電柱を見ると『電線がない！』。これなら電気は来ない。会社の人電線の下で事務所で宿直をしていたのに気が付かなかった一幕です。

私が宿直をしていた次の日、実験所から宇治の研究室に戻ると村本先生が『昨日の宿直は君か？』と怖い顔。聞くと河川総合実験施設の電車（計測台車）が動かないとのこと。でも計測台車の架線がどこにあるかも知らなかったのです。実験施設の裏の京阪電車側に走っているとのこと。

村本先生に怒られましたが一人であそこで宿直をしていると広くて暗い構内を懐中電灯を持って見回ることの方が怖い。夏の肝試しにはもってこいですが、『ちよっと遠慮したい』の気持ちです。

この時代に電線ドロなんて……。昔のことと思っていたのに……。

酒の肴になる話かな！？

中 川 修
(1969年3月退職)

いつもI氏との酒席では、巷の「文系」「理系」の話に、妙に「理系」の話題に興味を示されて話が発展することがあり、とりとめも無く二・三勧められるままに綴ってみたい。

まず、最初は、「鋼橋の素材を構造として最大限生かした使い方は、何か？」といった話題であった。これは、はがね(鋼)が引っ張ることに、最も耐えることから・・・「吊り橋ですよ！」の答えにいたく心を動かされた様子であった。

その後、算数(数学)の話になり、足し算(加算)、引き算(減算)の負(-)号の問題までは、数直線で理解して頂いたが、掛け算(乗算)、割り算(除算)における符号のことに及び、何故、負(-)号×負(-)号=正(+)号になるかの説明に、2次関数の一般解でお馴染みの虚数(i)において $i^2 = -1$ 、 $i = \sqrt{-1}$ なるものことからめて、「数直線上の回転である」との説明にもいたく感心されたのである。これは、 -1 の乗算や i の乗算が、それぞれ数直線上の原点(0)における 180° と 90° 回転操作で理解すればよいといえ、今まで、そのような説明は、初めてと言われなかなかい機会がないものとあらためて知ったのであった。

また、割り算(除算)の説明においても「割る数を1(単位)とすること」と理解すればいい・・・なる言葉にもまたまた感激くださったのである。そして、何故、「0」で割ってはいけなさを理解する上にも「0」を単位とすることは出来ない訳だからことさら納得して頂けたようだ。

このように、「文系」と「理系」のものにとらまえかたに興味を示さざる得なくなったのである。

そして、話は飛躍し、憲法を「記号論理学」で表記すれば、憲法9条は「伊達裁判」の範疇となり、現社会では、身動きが取れなくなってしまうなあ・・・との結論であり、それなら法律学者もいらぬなあ・・・てな話になった。

この事は、「文系」の恣意性と「理系」の論理性がいわゆる『社会の遊び(潤滑油)』として存在しなければならぬし、科学界においても、それに類似したものに『特異点』問題などで共通しているのではないだろうか・・・？

とりとめない話を終わります。

宇治川水理実験所の思い出

中 川 利 郎

(1999年度定年退職)

宇治川水理実験所の思い出をということで、私のような者にまでお言葉をかけていただき光栄に思います。

私と宇治川水理実験所は、京都大学防災研究所事務室会計掛に自動車運転手として奉職し、連絡便として午前は宇治分室から宇治川水理実験所と吉田防災事務室へ、午後からは宇治川水理実験所から宇治と吉田事務室へ帰る任務です。(一九六八年四月)特に午後の宇治川行きの便では(八人乗りのワゴン)後ろの席は後ろ向きに座るためジャンケンで決めていたり、車内で弁当を食べる人、皆さん気さくな方ばかりでした。車は宇治川の堤防に(土の道)下を見れば東洋一という河川総合の実験棟が出来かけていました。棟の前では、西村氏がダンプカーに指示して、グラウンドの埋め立てを皆さんでしておられました。これが、宇治川水理実験所と勤務されている皆様との出会いでした。一番びっくりしたのは、京都大学の教育をされる職場なのに、名前をあだ名で呼んでおられたのには驚きました。安さん、徹ちゃん、カゲちゃん、Bちゃん、コツブちゃん、ワカメちゃん、中には何でこんな名前が付いたのかと考えさせられるロクさん(伊藤誠氏;マンガの主人公)と、誰が付けたのか知りませんが実におもしろい実験所だなあと思った。

やがて河川総合も出来上がり式典が行われた。グラウンドも出来上がり、野球の練習や運動会をしておられました。土曜日の午後には、吉田の事務室からもソフトボールの試合に(防災研だけ)参加しました。その後、本館で懇親会があり二階と三階の踊り場で一曲歌ったことや、思い出せば思い出すほど次から次へと楽しかったことが浮かんできます。皆様にいろいろお世話になったということだと思います。お礼申し上げます。宇治川の事務室も本館二階の西南角にあり、次は別館一階に移り、また、別館二階に移られました。本館の時、雨の日などは傘を差し荷物を持って上がるのは大変でした。嶋田氏がおられ、手伝っていただきました。西村氏には、鯉釣りを教えて貰い。今井氏、山口氏には、竿立てを作っていただきました。

吉田事務室も一九六九年の四月には宇治の研究室に移転、十月には新館に入る。一九七〇年には、宇治川の部門も宇治の新館に移られ、宇治川も一部門だけとなり宇治から実験、観測に行っておられ、連絡便も午前は吉田本部との連絡、午後から宇治川行きとなりました。その時の一番の思い出は、総長杯の野球の優勝旗の話です。当時、防災研究所といえば、総長杯のスポーツ、野球、ソフトボール、卓球、バレーボール、テニスとみんな優勝旗を持って帰り、本部吉田の経理部他部局、研究所、学部にとってはいやな研究所であった。

その訳は、何をするのもゴム草履に半ズボン、バンドの代わりに紐のバンドと、相手チームには大変失礼なことですが優勝するのは防災でした。一九七〇年六月、総長杯の野球が行われることになり、優勝旗を持ってくるように本部の庶務部から通知があり、宇治川の嶋田氏に聞いたところどこにあるか分からないということです。その訳は、宇治への引っ越しで誰も覚えていない、日程は迫る、宇治川の倉庫、宇治の部門、嶋田、千代、石田氏他で探して貰ってもない。試合は明日に迫る。事務長に相談するがどうしようもない。所長に総長に謝って貰うことになった。その月宇治川に連絡便でいったところ、嶋田氏より優勝旗が今見つかったとのことでした。見つかったところは、我々みんなで何回も探したところでしたが、大切に奥の方に入れ誰も手が届かないように上に荷物を置き、分からないように盗難に遭わないようにと誰かが保管してくださったに違いありません。

当時の私の宇治川での一ページです。(優勝旗一九四五年からの物)その後、定年退職するまで野球が出来ました。私にとって宇治川水理実験所は、奉職以来毎日行き、定年前二年四ヶ月は勤務させていただいた一番の思い出の所です。構成、企画してくださった北川氏、藤原氏、技術室の皆様方の技術の向上と社会の貢献を心よりお祈り申し上げます。

未 来 へ

藤 原 清 司

私は、昭和 43 年 4 月に宇治川水理実験所に来ました。大学受験に失敗し、積極的な就職活動を何もしていなかった私は、京大から来た面接の通知を渡りに舟とばかりに合法的な家出のパスポートにして、鄙びた北陸の寒村から京都に出て来たのです。実験所との最初の出会いで今でも憶えていることは、宇治川水理実験所に就職が決まり、その当時庶務掛長だった松村一範さんと一緒に、吉田にあった防災研究所の事務室から連絡便の車に乗せてもらい、防災研究所の所長をされていた矢野勝正先生に挨拶に行ったことです。南側と東側に大きな窓が開いた実験所本館二階角の研究室で、でっぴりと太って貫禄と凄みのある土方の親方みたいな風格の先生にお会いしました。その日から今日まで、約 34 年間ずっと離れることなく実験所に勤めている訳ですが、私の当初の思い出は、他の OB の方達を書いておられることと重なるところも多いと思われまので、私は、最近の宇治川水理実験所について書いてみたいと思います。ただ、勤め始めて最初の頃の思い出の一つに、私は最初、谷 泰雄さん、嶋田 至さん、野村 新さん、似内汎子さん達がおられた本館の南西角の図書室に連なった実験所の事務室に机をもらったのですが、勤めだしてから暫く経った初夏の頃、谷さんをはじめとする事務室の男性の先輩方に、私の歓迎会をかねて京都北山の貴船に暑気払いに連れて行ってもらったことを思い出します。そこには、私が来る前に事務室におられた奥野 正（現滋賀医科大学）さんも来られていたように記憶しています。出町柳から、青葉が薫る初夏の汗ばむ中を狭い谷間に沿ってガタゴトと揺られながら初めて叡電に乗り、貴船川の涼しい床の上で冷たいビールを飲んだことが、今でも鮮やかな印象となって残っています。

さて、宇治川水理実験所の近況を述べなければなりません。宇治川水理実験所は、旧建設省による洛南道路の建設工事のため東西に二分され、平成 9 年の春から始まった補償工事によって新たに四つの大きな実験棟が建設されました。平成 10 年の秋に完成した新実験棟には、それまで野外にあった実験施設の多くが収納され、それまでのように雑草や風雨に悩まされることなく、安心して実験に専念することができるようになりました。ここで、新実験棟の概要を簡単に述べますと、いずれも鉄骨造り平家建てで、床面積が第 1 実験棟は 6,775 m²、第 2 実験棟は 2,940 m²、第 3 実験棟は 4,480 m²、第 4 実験棟は 4,375 m²であり、各実験棟毎に第 1 実験棟から青、茶、緑、こげ茶のポイントカラーが窓部分のパネルに施され、屋根部分は蒲鉾形に大きくゆるやかな円弧を描いています。

また、局地異常気象観測施設の観測鉄塔やライシメータ、洪水流実験施設もそれまでの位置を変えて新たに造り替えられました。このように実験所は、新しく生まれ変わった部分と、旧来の本館や管理棟などのいささかたびれた部分とに分かれてしまいました。その中でも特に、実験所のシンボルでもある本館は、平成 7 年の阪神大震災以降老朽化が急速に進み、壁の剥落や屋根の雨漏り、床の迫り上がりなど随所において建物の傷みが大変

ひどくなってきています。そのため本館は、今年度中に危険建物として取り壊されることになりました。大正12年に火力発電所として建設されて以来、約80年の長い歳月を風雪に耐え宇治川畔に蔦の絡まるその偉容を誇ってきた本館も、ようやくその役目を終えるときがやって来たのです。

OBの方達にとっても、泣いたり笑ったりした色々な思い出がいっぱい詰まった建物だと思います。最近では、日曜画家のおばちゃんや写真学校の学生さんなどの写生や撮影の格好の対象としても活躍していました。宇治川水理実験所は、昭和27年3月の命名時から数えて今年でちょうど50年を過ぎたことになりますが、そのような記念すべき年に本館が無くなるのも何か不思議な縁かも知れません。その他、火力発電所時代に管理棟として使われていた木造の建物や鉄筋コンクリート二階建ての現在の管理棟、土質力学の実験に使われていた二棟の建物、樋口明生先生のグループが潮流の実験に使っておられた海洋河口実験施設なども、近ごろだんだんとほころびが目立つようになってきましたが、今なお宇治川水理実験所の歴史の生き証人として健在です。

最近になって実験所構内に多くの植林がされました。後数年、数十年もすれば楠や白樫、金木犀などの立派な林が構内のあちらこちらに育ち、桜並木が美しく宇治川、東高瀬川の畔を飾ることでしょう。そして、野鳥や野ウサギ、狸や恋人達のよい散策コースとなるに違いありません。まだ所々に鄙びた面影を残す伏見の町の中でも、中書島の隠れた名所になるかも知れません。実験所を二分した道路建設の方は、国土交通省の洛南道路に続いて阪神高速道路公団による京都高速道路油小路線の建設が並行して行われており、洛南道路の方は平成15年春から供用開始の予定となっているようです。道路建設の影響により、今後、どのように実験所が変わっていくのか予想もつきませんが、実験所周辺の宇治川や東高瀬川など都会の片隅の数少ない大自然に囲まれたこの場所が、いつまでも今のままの姿を保ち続けることを祈ってやみません。また、国立大学の独立行政法人化が性急に叫ばれ

ている今、制度的にも現代社会の荒波にもまれようとしている実験所の将来が、社会の要請に応え大きく発展することを願っています。



解体工事中的本館(2003.3.5 現在)